

時事新報

時事新報

第二千五百十號
明治廿一年九月十七日 (辛卯)
舊曆八月二十二日
日出版五時二十分
月入金五元
半年入金二十八元
年入金五十二元
西曆一千八百八十八年

歸朝記事(一昨日の續) 福澤一太郎氏英文の翻譯
 左れば今博物學の事に立戻りて之を云はんは純然たる
 學理の點より動物園の尊重を論じて實際家の心の顯
 にも叶ふ可き直接の利益あるを見る可し即ち人類と
 動物との間に至當の情感を生ずるべしなり試みに動物園
 に遊んで禽獸の智あるを見れば禽獸必ずしも禽獸なら
 ずして會て獸化したる所に異あるものあるを發明する
 可し余曾てローゼンローマン氏の著述動物智
 識と題する書中にフンリッパク氏が千辛萬苦して吟
 味したる蜂の智慧の事と又同書中に猿が常に事物を探
 索する性質の事を記したる條を讀みて坐に愛憐の情を
 催はし世上の必な人は如何かれば斯くも禽獸を虐待
 するやと之を思ふて雙眼涙の盈るを覺えたりし、動
 物愛憐の情を實際に施し其一例を擧れば余が米國
 に在りしとき盛夏の時節乗合馬車の馬を見るに其頭
 の邊には薄綿に水を包みたるものを戴かしめざるもの
 し馬を憐むの情に出でるとならん途に聞けば我東京
 の銀座通にては炎暑に馬の驚るもの多しと云ふ憐む
 可きに非ずや日本人が若しも此些細なる海綿、水の事
 を既に注意して用ひらば誠に悦ばしきものと云ふ其誠
 は尙中然らざるに於ては何か然る可き工風を施して馬
 の苦しみを軽くせんこと望望に堪へず是等は獨り仁の
 事のみならず經濟の點より見るも等閑に附す可らざる
 ものなり又余が米國に在るとき農學士某氏と共に馬
 車に乗て野外に出たるとあり氏の愛馬は名をガムッ
 ーニアと呼び如何にも能く走る其折しも程遠からぬ處
 に時々大砲の響するよど氏が何か馬を合圖しければ
 マフーニアは度度にても聲を應じて歩を止め少し
 馬かざる其有様は馬と主人と同心同體なるが如し本家
 馬の性質は最も物と愛して最も驚き易きものなるに今こ
 の馬の斯の如くなるは氏が常に之を監視せしめて能く
 之を愛し之を敬ぶるが故の故に余は愛に筆端と改
 め馬は難く可らず之を敬ぶ可し馬は智慧ある動物され
 ばありと一言して以て動物園見物の局を結び、轉じて
 ウォストミンスタ寺院と歩を進めたり此寺院の事はワ
 レントンアイムヤング氏の著書に詳なれば爰も余が
 記事を要せず唯注目す可きは此大寺院中に有名なる學
 者又英傑某の墓碑多き事なり立憲政體に王室を戴く
 國權に於ては古人に厚くして其遺跡を表するも亦以て
 今世の人物を獎勵するの法なる可し、グレイの劇場
 に行て一見せしに狂言はミカド芝居なり此芝居は既
 古きものなるを今以て觀客の多き少しく不審され
 も其然る所以は倫敦の大都會に人口多くして日々客
 の大著る爲め左なくは美人の守衛風にて芝居までも
 舊きを好む故ならん劇場は餘り廣うらずしてボース
 トンのものより少しづつづの相違ありボースト
 ンの劇場にて観客は六より多からざれども倫敦にては九
 の數ありて多人數を容れ観客の領分甚だ廣し観客の外

の席も數は少なけれども廣さの廣し、米國の幕は上
 上る仕掛けなれども倫敦の幕は真中より左右に引分る
 ものなり又米國にて劇場の周旋方は一様の服を着けた
 る男の小供あれども倫敦にては都て婦人なり又倫敦の
 劇場にては見物の婦人は帽子を對さず是れは他の見物
 を妨げざるの趣意ならん米國にて婦人が高大なる帽子
 と戴て人の目を遮るとは男子の毎不平を訴ふる所
 あり僅く英米の間に劇場も多少の相異あるは全く其
 國々の習慣に従ふものならん劇に聞けば日本にも芝居
 改良より申す流行の説あるよし何れの邊に迄改良する
 こと知らざれども之を改めて長からしめ以て人情を
 憐るならんとするは随分易きことならざる可し
 鄙見を以て英國人一般の氣風を許すれば英人は實を
 以て體て成す者なり、英人は事物の永續を得んが爲め
 又外面の裝飾を重んずる者なり、英人は實して大丈夫な
 る家に住居し英の汽車は實して大丈夫ある陸道を走り
 、其食ふ所の物に實はローストビーフは大切に
 てピフスタキは厚し、飲料は黒色のストウ(麥酒)
 と苛烈なるウスキにして是亦濃厚なり、其非するや體
 を強實ならしめんが爲め歩一歩に連れて右と左の肩を
 進め其携ふる所の杖の質も亦實して杖の頭は大なり
 男子のみならず此節漸く日傘の時候に際し英婦人の
 携ふる日傘を見るに何れも大丈夫にして長さ六尺もあ
 らんかと思はるるものあり左れば實質、永久、大丈夫は
 英人の天性にして萬事萬物み亦此性に従て組織し又製
 作するが故に時勢の變遷と共に改革を要するの日に迫
 り自から其必要を知らざるも非ざれども何分にも之を
 斷行するを得ず遂に習慣の力に制せられて守舊を悦ぶ
 の人民たりしものならん此一事に就ては日本人に聊か
 短所あるが如し又英人の報國心を表する其心事を視れ
 ば熱度の高きこと時として人を笑はしむるものあり余
 或る時一婦人に逢ひしは此婦人は曾て大陸に渡らず又
 渡る心もなくして僅に八時間程の巴里をさへ見ず唯そ
 の眞人は毎度巴里に往來しうると云ふ此婦人が如何な
 る譯にや日耳曼人を恐むる甚だしく日耳曼人の悪く
 さは實に言語を盡し難し彼等は實に思ひ可き人民にし
 て余は火箸もて之を挟み上る氣もなしと云へり又同婦
 人は大陸の人民を目して華美奢侈なりとて痛く之を擯
 斥せしが此邊に於ては余も聊か同意を表せざるを得ず
 英國が今日に至るまで尙ほ世界に對して獅子王の名を
 成す其原因の中は同國人の實業倫理も亦一箇條とし
 て計ふ可きものなればなり、記事終り余は此自由政治
 國を辭して將に佛蘭西に赴かんとする者なり (畢)

間を費すこと夥しきを以て一切の着川と禁するの
 規則を定めざるが左の如き説明を以てその規則の不
 當ならざるを證したり其説明は曰く凡そ娘は一日に五
 度パスルを直せしものなり一度一分づつを費すものと
 すれば之が爲め一日に五分間の損とある今十二人の娘
 が一日五分間づつ損をすれば都合一時間の損となる
 其他工女は一日中工場を離るると五回より多くその
 時間は六分五分間位かると其常れば二十五分乃至
 半時間は之が爲め損となるなり十二人の工女の半時
 間は合せて六時間となり而して之にパスルを直す爲
 めの一時間を加ふるると都合七時間の全損とあるべ
 し一日七時間は一周間四十二時間にして之を金にて算
 するときは其損失莫大なり今倫敦に於てパスルを着
 用する所の婦人は其數百萬人とするときは倫敦のみに
 ても一日に五十年より多くの時間を徒費するの割合な
 りと

○日本の牧畜業 近來我國に於て牛乳の需用漸く益
 肉食の習慣愈々盛なるに及んで實業志ある人は牧畜
 の我國に於て今日忽にすべからざるを慮り先き
 は官の獎勵を待つて僅かに其事に着手せし有様あり
 しも二三年來は全く反對の情況を顯し實業家自ら奮
 つて遠く海外に航し外國の乳牛其他の畜類を輸入する
 ものも少なからざるに至りしは我國の爲めに甚だ喜ば
 べき次第なれども今久しく米國に在りて牧畜の事に精
 しき或る人の話を聞くに此等の人は折角日本の牧畜を
 改良するの志を以て遠く海外へ航する事なれども事情
 に慣れぬ土地に赴きて未だ曾て見し事も無き畜類を
 買ひ寄る事あるを以て其持歸るもの多くは雜取にして
 米國にては一頭の價廿五弗より三十五弗内外あるもの
 を買付られ此牛一度日本に渡れば二百五十圓より三
 百五十圓凡そ十倍位の價を以て買賣するに至る事あり
 りと云ふ固より我國まで持歸りたる上は運搬の費用も
 掛り且は養育供給の不均均より斯く高價とある事なる
 べけれども鬼に角畜類改良の意見を抱きながら斯る始
 末までは到底改良の目的を達する事能はざるべしと
 り抑も是等の下等種は悪性の遺傳病を有し殊に米國輸
 入の牛に結核性に罹りしもの多きは我國畜醫家の既
 思ふる所にして此病を傳播するは實に牧畜上容易な
 らざる害毒なりと云ふ且畜類蕃殖の理に於て數代の間
 固定したる種は其固有の悪性を他へ傳ふる事甚だ強
 固定したる種は其固有の悪性を他へ傳ふる事甚だ強
 死者あれば我國の畜類を改良するは愚の却て不其の病
 毒を傳ふるの恐なきにあらざれば之れを改良するに
 は健全無病種格性能共に善長にして數十代連綿する有
 純種種を以て之れに代る事必要なり是等の有純種類
 は固より其價往日は數千金のものありしも今日百弗
 内の種類もあり有名なる短角種の如きは三百弗位を平
 均相場なりとするよし現に角我國の畜類を改良するに
 は是等の良畜を輸入する事必要なれども之を爲すには
 我國の資本家が蓄積して資金六七萬圓を募りて畜類會
 社なるものを設立し會社は外國牛馬羊豚等の純良なる
 ものを輸入し會社自ら之れを播種し又他の牧畜家の
 依頼し應じて各々望む所の有純種を輸入すると同時
 會社は米國に於て一大牧場を求め並に平常人を派して
 時に適宜の家畜ある時平日之と購入して該牧場にて
 飼養蕃殖せしむる事となさば需用のある度人に派し
 又は諸州を遍歴するの旅費を除き得るのみならず倉庫
 買求むるにあらざるより撰振自ら精に價値又廉なる
 を得るならん加之昨今米國の原野は地味豊沃して其

價低廉なるも日
 は地價二三倍若
 ことなれば歐州
 面を買ひ置き將
 りするも米國に
 へり
 ○洋服、和服
 程甚しきもの
 洋服を着たるもの
 すはよるなきが如
 巡査兵卒の外重
 の餘り遂に洋服
 でもと云ふとは
 して衣服に及ぶ
 地方にて愚民の
 より一蒙の洋服
 のものも旅の人
 置置死民時しの
 りと云ふ近來各
 置あるに付け其
 料を取て私立會
 五六圓位の身
 の一事を以て大
 民なれども汽車
 なり御客を對して
 般の習ひなれど
 力あり乗客は半
 たる金を出して
 動觀音の護札の
 々揚りて用なき
 も横風にして商
 なり是れと云ふ
 及び洋服、和服
 るよ由るなる可
 か實に際限な
 のはなし
 ○新刊書 六七
 さは六十餘日短
 志す方へ
 書籍を購讀する
 の費用を補は
 しどかや例年
 も多くは期節を
 風の立初めて燈
 は善きも悪きも
 り本年も亦此の
 も今日の頃は
 端より之を披露
 野時中氏に論述
 し今回の第一編
 等なり最初の目
 も實際に之を論
 ものならん歎免
 にも快断にきて
 尤も此篇の行政
 二篇三篇の細目